提督が最速で鎮守府に着任しました

パイマン

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「スピードなら誰にも負けません！　速きこと、島風の如し、です！」

「オレより速く動くつもりかい？　お嬢ちゃん！」

「おうっ!?」

提督が鎮守府に着任する際にまた世界を縮めてしまったようです――。

目次

前編 …… 1
後編 …… 18

前編

二十一世紀初頭――。

神奈川県の一部で突如、横浜を中心に自然現象ではあり得ないほどのエネルギーの放出を確認。大規模な隆起現象に繋がる。

これにより発生地点の半径約２０ｋｍから３０ｋｍ・高さ２４０メートル以上にも及ぶ『ロストグラウンド』と呼ばれる大地が誕生した。

エネルギーの正体、発生原因は今以て不明のままである。

首都圏全域の機能が失われ、政治・経済も長期に渡る停滞を続けることになった。

大隆起現象から十八年後、ロストグラウンドは日本においての完全独立自治領連経済特別区域と認定される。その背景には、ロストグラウンド生まれの約２％の新生児に『アルター能力』という特殊能力を持つ者達が現れ始めたということがある。

ＡＬＴＥＲ――正式には『精神感応性物質変換能力』と名称されるこの超常的な力は、自分の意志により周辺の生物以外のあらゆる物質を原子レベルで分解し、各々の特殊能力形態に再構成することが出来る特殊能力である。

彼らは『アルター使い』や『ネイティブアルター』と呼ばれ、その多くが在住するロストグラウンドを中心に、一般社会とその住人達に忌避された。

アルターを用いた暴力や略奪を行う『アルター犯罪』が深刻化する中、それに対応する特殊部隊も設立され、危ういバランスを保ちながらも人類の営みはおおむねこれまでと同じように続いていた。

しかし、新たな時代の変革は、今度は海からやって来た。

人類に無条件の敵意を示すその存在の名は『深海棲艦（しんかいせいかん）』

その脅威に対抗すべく生まれたのは、在りし日の艦艇の魂を持つ娘達『艦娘（かんむす）』である。

人類にとっての敵と味方――彼女達は、いずれも突然に現れた。

かつての大隆起現象のように。

あまりにも突然に、その二つの存在は人類の前へと現れたのだ――。

◆

――速いほど良い。

島風は様々な物事に対して概ねそのような結論を出す。

戦場では速さが重大な要素となる。

情報も判断も行動も速い方が良い。敵より一歩先んじれば戦況は有利になり、逆に一手遅れればそれは時として致命的な不利となる。

迅速に行動すれば、それだけ敵を攻めることが出来、同時に味方を守ることも出来るのだ。

日頃、何かと速さを基準に忙しない言動を繰り出す島風の中には、そんな戦場を基準としたシビアな考え方と固い信念が隠れている。

とはいえ、ただ単純に『艦娘の中でも最速』というプライドと自信から来る拘りも多分にあるのだが。

とにかく、島風にとって『速い』ということは重要であった。

誰よりも速いという事実は、これ以上無い優越感であった。

鎮守府に住む艦娘の誰よりも早く、島風は就寝する。

そして、朝は誰よりも早く目覚める。

寝起きでボーっとしているなんて悠長な真似はしない。洗面台で冷水を叩きつけるように顔を洗い、速効で意識を覚醒させる。

着替えだって最速だ。この為に布面積の少ない服を着ていると言って良い。

最速の準備を終えた島風は、最短ルートを選んで、提督の執務室へ走った。

一度、大きな足音を立てすぎて、早朝の騒音問題として上官の加賀にこってりと絞られて以来静かに走るようにしている。

しかし、多少速度が落ちようが自身の速さは揺ぎ無い。むしろ、足音を殺した走りにおいても自分が最速であると新たに証明されたくらいだ。島風はその事実に満足していた。

早朝の鎮守府は静かだった。
夜警の為に夜通し起きている当直の艦娘を除いて、動いている者はいない。
島風はこの朝の時間帯が好きだった。
一日の始まりに、誰よりも早く動き出している実感が自分を幸せにしてくれる。
この鎮守府に着任したのは最近のことだが、未だにこの幸福感を打ち破った艦娘はいない。
そう――『艦娘』は。
艦娘用の寮から提督の執務室へと、島風はあっという間に辿り着いた。
どんなに勤勉な提督であっても、こんなに早い時間から執務室にいるはずはない。
仮に自分と同じ時間に眼が覚めたとしても、部屋に辿り着く為の物理的な速さでだって、先を越されるはずがないのだ。
だから、そう。
――今日こそ、自分が一番乗りだ！
「おっはよー！」
勢い良くドアを開け放ちながら、島風は誰もいないはずの室内に向かって朝の第一声を放った。
そして、朝の第二声はもう決めてある。
自分の後から来た提督を待ち構えて、こう言ってやるのだ――。
「遅いぞ、シカマセ！」
既にデスクに腰掛け、優雅に朝のコーヒーを嗜む提督の姿を見て、島風は呆然とするしかなかった。
座っていても島風より高い身長とそれ以上に長い足を組み、撫で付けた髪から一房だけ前髪が垂れている。
顔立ちはハンサムと言っていいが、目元は大抵愛用のサングラスで隠している。そして、口元には常に不敵な笑みが浮かんでいた。
島風は、その見慣れた笑みが嫌いだった。
そこからはいつだって溢れるほどの自信が感じ取れるからだ。

自分と同じ、速さに対する絶対の自信が。
先程までの幸福感をぶち壊され、島風は頬を膨らませながら言った。
「わたしは遅くなんかないもん！　それとわたしはカマセじゃない、島風！」
「ハッハッハッ！　これはすまん！」
ちっともすまなさそうではない様子で高笑いをする提督を、真っ赤になりながら睨みつける。
この鎮守府で何よりも一番気に入らないこと――。
それは自分の提督がこの男だということだ。
そして、こいつが自分よりも常に速いということだ。
島風は提督が大嫌いだった。
常に自分よりも速い、このストレイト・クーガーという男が。

◆

間宮食堂――その名のとおり給糧艦としての機能を持つ艦娘『間宮』が運営する食堂である。
厨房を取り仕切るのは間宮当人であるが、配膳などを鎮守府所属の艦娘達による当番制にしており、日中は常時開放して軽食程度ならば何時でも注文出来る為、非番の艦娘達の憩いの場となっていた。
「提督なんて大っ嫌い！」
少なくとも島風以外の艦娘にとっては憩いの場であった。
「ま、まあまあ島風ちゃん、落ち着いて。巻雲のアイス、一口食べます？」
隣に座る巻雲が、島風の怒らせた肩を撫でながら言った。
着任時期が同じであるこの二人は、その縁からプライベートでも共に行動することが多い。
正確には、着任当時から協調性に欠けていて集団行動では孤立しがちだった島風を、巻雲が何かと気に掛けている内に親しくなったのだ。

「聞いてよ、巻雲ちゃん！　あいつ、またわたしの名前を間違えたんだよ!?」
「提督を『あいつ』呼ばわりしてはいけません」
不機嫌な島風を優しく宥める巻雲に対して、厳しく戒めるのは対面に座る加賀だった。
正規空母の艦娘である彼女は、優れた性能を持っているとはいえ駆逐艦に過ぎない島風にとって上官のようなものであり、目上の相手でもある。
この鎮守府での経歴も長く、艦隊の主力として活躍し続ける実績と貫禄を持っていた。
ついでに、純粋に苦手な性格の相手だ。
とはいえ、この鎮守府では新人である島風にとって貴重な仲間であり友人であることに違いはない。決して口に出したりしないが、加賀のことは尊敬もしている。
方向性は違えど、二人の友人に諌められて、島風は不満そうにしながらも愚痴を止めた。
「それに、あの人が名前を間違えるのは、気に入った相手への愛情表現みたいなところもあるから」
「ええっ!?　ウッソだー！」
加賀の意外な言葉に、島風は眼を丸くした。
「愛情？　あの提督が？　二言目には『速さ』しか言わない、あのスピードバカが？　ありえない！」
「それ、島風ちゃんが言っちゃうかなぁ……」
巻雲は当人に聞こえない程度の小声でツッコんだ。
「あなたも速さには拘りがあるでしょう。そういう所を、提督も気に入っているのだと思うわ」
「でも、何かって言うとわたしより速いことを自慢するし、逆にわたしが遅れたことをからかうし……」
「あなたが常日頃から主張している速さを、無視するのではなく張り合う程度に認めているということよ。それに、立場が逆になったら多分あなたも同じことをするでしょう。だからこそ、毎回提督に突っか

かっているわけだし」
「う〝っ……それは、そうだけどぉ……」
「私も着任当初は名前を間違えられていたものよ。今でも、たまに間違えてこっちの反応を楽しんでるような時があるわ」
「そうなの!?」
「あの人との付き合いも長いですから」
加賀はクーガーの秘書艦である。
エキセントリックな提督とクールな正規空母のコンビは、新人の艦娘に常に驚きと意外性を提供するが、最終的には奇妙な納得に落ち着く。
仕事中の二人の連携は完璧に噛み合っているのだ。
「どうすれば名前を間違えられないように出来るの!?」
「さあ?」
「意地悪しないで教えてよ、加賀!」
「私よりも、巻雲に聞いた方が良いのでは? 彼女も一度、提督に名前を間違えられたけれど、すぐに訂正されたわ」
「ホント!? ねっ、巻雲ちゃん! どうやったの!?」
期待を込めて詰め寄る島風に、巻雲は酷く気まずそうに答えた。
「……間違えて『マキグソ』って呼ばれた時に本気で泣いたら、ビックリするくらい謝ってくれて、それからもう二度と間違わないって誓ってもらえました」
答えを聞いた島風も、気まずそうに身を引いた。
「……なんか、ごめん」
「いえ……」
微妙な空気になってしまった二人をフォローするように、加賀が口を挟んだ。
「とにかく、提督があなたの名前を間違えるのは悪意があってのことではないのよ。安心しなさい」
「べ、別に不安だったわけじゃないもん! 不満だっただけだもん!
そもそも、わたしは提督のこと嫌いだし! ちゃんと名前呼んでくれたら、それが少しはマシになるだけだし!」

「そう」
「……なんか反応が投げやり～。本当なんだからねっ！」
「そうね。プロテインね」
「もっと投げやりになった!?」
島風の愚痴に付き合う形で始まったじゃれ合いは、いつまでも続きそうだった。
その時、まるでタイミングを測ったかのように話題の中心となっている人物が食堂へ入ってくるのが見えた。
誰よりも早くそれに気付いたのは島風だった。
「あっ、提督ー！」
次の瞬間にはもうクーガーの元へと駆け寄っていた。
つい先程まで会話をしていた二人を完全に置き去りにしている。
呆気にとられる巻雲と加賀を尻目に、島風はクーガーの腰に纏わりついた。
「おおっ、シカマセじゃないか。何だ？　オレに追いつけないからって、食堂に先回りしてたのか？」
「カマセじゃない、島風！　それに待ち伏せなんて遅い奴がすることだもん！　提督はご飯食べにきたの？」
「まあな。お前もまだ食ってないのか？」
「うんっ！　ねぇ、一緒に食べよう？」
「ほう？　それはもちろん和気藹々とテーブルを囲みましょうってわけじゃないんだろうなぁ」
「もちろん！　わたしと勝負しよっ！」
「ハッハッハッ！　早食い対決でもしようってのか？　あ、間宮さん。A定食をお願いします。お前も同じのでいいか、シカマセ？」
「うん、いいよ。あと、島風！」
「ハハハッ、悪い悪い」
口喧嘩というにはテンポの良すぎる会話を繰り広げる二人。
突っかかる島風に対して、クーガーは余裕の態度で受け流している。
傍から見れば、子供に向ける大人の対応だ。

その様子を眺めていた巻雲は、加賀の言っていた『気に入った相手への愛情表現』という解釈が正しいことを理解し始めていた。
クーガーは、どう見ても島風の反応を面白がっている。
そして、島風の方もクーガーを嫌っているとは到底思えない態度だ。構って欲しいだけにしか見えない。
やがてトレイに載った定食を受け取ったクーガーと島風は、自然と向かい合う席に腰を降ろした。
「よーし、勝負だよ提督！　先にご飯を食べ終わった方が勝ち！　はい、スタート！」
「はいはい、いただきます」
猛烈な勢いで食べ始める島風とは違い、クーガーはゆっくりと味わいながら食事を口に運んでいく。
「――ごちそうさま！　あれあれ、提督ってばまだ食べ終わってないのぉ？　おっそーい！」
「なあ、シカマセ」
「何、負けた言い訳？　それと、わたしは島風！」
「お前は速さというものを履き違えているな」
「な、なにおう!?」
「食事ってのはな、競うものじゃない。楽しむものだ。食事は人の心を豊かにし、エネルギーと明日への活力を生み出してくれる。ここに速さは必要ない。味を堪能する為に歯で噛み砕いて食べ物を胃へと流し込む。間宮さんが丹精込めて作ってくれた食事を碌に味わわずに飲み下すということは文化の損失だ。よく噛まないから消化にも悪いしな。つまり消化が遅いってことでもある」
流れるような早口で捲くし立てるクーガーの理屈は所々納得のいかないものだったが、精神的に幼い面のある島風には反論も出来なかった。
「飯くらいゆっくり食え。落ち着きがないぞ」
「む、む、むぅぅ～～～っ！」
競うものではないと言いながら勝ち誇った笑みを浮かべるクーガーと、逆に悔しげに頬を膨らます島風。

納得のいかない敗北感を噛み締めながら、睨みつけるしかない。
「それと、まだ皿にニンジンが残ってるぞ。ちゃんと食えよ」
「……二、ニンジン嫌いなんだもん」
「オレが食い終わるまでにそいつを食えなきゃ、勝負はオレの勝ちってことになるなぁ？」
「勝負じゃないって言ったじゃない!?」
「ハッハッハッ！　まあ、オレはどっちでもいいんだがな。う～ん、デリシャス。今日も間宮さんの料理は最高だ」
そのまま優雅に食事を続けるクーガーと、ニンジンの煮物を睨んだまま固まってしまった島風。
一連のやりとりを眺めていた巻雲と加賀は、揃って顔を見合わせた。
「……島風ちゃん、お昼食べないのかと思ってたら司令官様を待ってたんですねぇ」
「視線の動きが分かりやすかったわね。入り口をチラチラと気にしていたわ」
「二人とも楽しそうですねぇ」
「ああいう跳ねっ返りを相手にするの好きらしいわよ、あの人」
妙に実感の篭もった言葉を聞きながら、巻雲は思った。
そういえば、島風ちゃんも今のように懐くまでは加賀さんへの愚痴をよく零していたし、加賀さんが着任当初は提督に反発していたという話を何処かで聞いたなぁ、と。
思い浮かんだ『似た者同士』という単語は、胸の内に収めておくことにした。

◆

「ＯＨ！　ジャマ！　ジャマー！」
「……」
「これ今、市街で流行ってるんですよ。つまらなかったですか寒いですかヒキましたか痛かったですか～？」

「その中ではどちらかというとヒキました」
「ああっ！　相変わらず鉄板な返しだぁ～。クールですねぇ、ガガさん」
「加賀です」
「いやぁ、すみませぇん」
少しもすまなさそうではない表情でクーガーは執務室のデスクに腰を降ろした。
傍らには秘書艦用のデスクに座った加賀が、淡々と書類の山を片付けている。
比べて、クーガーの机上には数枚の書類しか載っていない。そのいずれも、加賀が事前に処理し、鎮守府の責任者であるクーガーの認可待ちという内容の書類だった。
詰まるところ、執務室でのクーガーの仕事は目の前に出される書類を確認して判を押すだけしかない。
「毎度思うことですけど、こうして加賀さんに仕事を押し付けるのは心苦しいですなぁ」
机の上に足を組んで投げ出し、片手に書類を流し読みしながらクーガーは呟いた。
「そう思うのなら、執務室に居座る努力くらいはして欲しいものだわ」
「椅子を尻で磨くだけの仕事ってのも不毛に感じましてね」
「だからといって、秘書艦である私にも秘密の電話や外出を定期的に行うというのは如何なものかしら？」
「いやぁ、手厳しい」
恥ずかしそうに頭を掻くクーガーを一瞥し、加賀はペンを走らせる手を止めた。
「提督。あなたがこの鎮守府に着任したのは何ヶ月前だったかしら？」
「丁度、半年ですなぁ」
「思えば、私達も長い付き合いになったものね」
「おっ、感慨深い話の切り出し方をしますねぇ。ひょっとしてアレですか、いよいよ我々の関係を更に一歩進める時が来ましたか？　あ

あっ、皆まで言わないでください！　アナタの中でこの進展を早すぎると躊躇する気持ちもあるかもしれません。しかしそれは杞憂です！　男女の仲に遅いということはありません！　出会いはいつだって先手必勝！　恋愛のステージは全速力で駆け上げっていくものなのだとオレはそう思うんですよガガさぁぁーーーん!!」
「加賀です」
「ハッハッハッ、すみませぇん」
　茶化したように笑いながら、クーガーは加賀の顔をじっと見つめた。
　普段通りの感情を表に出さない涼しげな目元。並の男ならばただ見惚れるしかない美麗な顔付きに、しかしクーガーは静かな真剣味を感じ取った。そして、相手の意図をあえて酌まないほど付き合いの浅い仲ではない。
　クーガーは机の上から足を降ろして、改めて加賀に向き直った。
「オレに何か訊きたいことがありますか？」
「いつだってあります。でも、あなたが訊いて欲しくないというのなら、私は訊かないわ」
「尽くす女性だ、アナタは。将来、夫になる男は幸せ者ですなぁ」
「夫にするなら、肝心な時に茶化して誤魔化さない男がいいわ」
「本当に手厳しい」
　クーガーは苦笑を浮かべた。
「加賀さん、オレの本職は提督じゃありません。本当の仕事は別にあります」
「あなたが軍属でないことくらいならば、知っています」
「実際に所属しているのは『ＨＯＬＹ（ホーリー）』という特殊部隊です。やってることは、まあ警察みたいなもので。オレはその部隊の一隊員であり、本来は誰かに命令出来るような偉い立場の人間じゃありません。そんな能力もありませんし、何より性に合いませんからね」
「でも、この鎮守府はあなたを中心に纏まっているわ」
「そのさりげないフォロー！　やはりアナタは優しい女性だ、ガガさぁん！」

「加賀です。話の続きをどうぞ」
「うーん、クールビューティー。……まあ、とにかくオレはそのＨＯＬＹから出張する形で、この鎮守府に勤めてます。時々姿を消すのは、本来の仕事に戻っている為ですよ」
「その本来の仕事が、この鎮守府の運営に深く関わっているのね」
「ご想像にお任せします」
「構わないわ。別に真実が知りたいわけではないの。納得が欲しいわけでもない。あなたが何も話さなくてもよかった」
加賀は一度眼を閉じ、改めてクーガーの眼を見据えた。
クーガーの口元に浮かんでいた笑みが一瞬消えるほどに、真摯な眼差しだった。
「私を――私達艦娘を取り巻く環境がどのようなものなのか、私も含めて正確に把握している者はいないでしょう。
私達には敵がいる。だから、戦っている。自分が何者なのかも分からないのに、それを理解する前に行動出来るのは目的と意義が与えられているから。疑問と苦悩が湧かないのは、闘争がそれを誤魔化してくれるから。
私達は何処から来たのか？　敵は何処から来るのか？　何故私達にはかつて船であった記憶があるのか？　その記憶が訴えかけるものは？　その意味は？　何故、私達はこの世界に生まれたのか――」
加賀の独白を、クーガーはじっと聞いていた。
「それを知りたいのは、艦娘自身よりも、むしろ人間の方でしょうね」
「……やはり、あなたは聡明な方だ。加賀さん」
「そうですね、加賀です」
この場面で、名前を間違われなかったことが、何故か少し悲しかった。
その内心を見抜いたかのように、クーガーがニンマリと笑みを浮かべた。
「そんなに悲観的になることはありませんよ、ガガさぁん！」
「加賀です」
「加賀さん、オレはこう思うんです。結論を急ぐことは、決して決断の

早さと同義ではないと。
　自身を取り巻く環境が自身の意思を無視して動いていく大きなうねりのようなものに不安を感じることはあるでしょう。そして、大抵の人間はそのうねりに流されていくことしか出来ません。自分が今立っている場所は何処なのか？　それが分からないことが自己や他者の不信へと繋がり、焦りを生む。生まれた焦りが間違った結論を生み出す。そして、その結論が時として不幸を招く。これを防ぐ手段は一つしかありません！　自分か他人、どちらかを信じてみることです!!」
「……あなたを信じろ、と言うのですか？」
「あるいは、自分を信じるか、です。例え周りが敵だらけだろうと、自分だけは最後まで自分の味方のはずですから」
「では、提督。あなたは？　あなたは誰の味方なのかしら？」
「愚問ですなぁ。オレは――」
　その言葉の続きは、突如鳴った内線のコール音に遮られた。
　クーガーと加賀は同時に視線を走らせ、やはり同じタイミングで再度相手の様子を窺った。
　自然と眼が合い、クーガーは妙な気恥ずかしさを誤魔化すように頭を掻き、加賀は小さく咳払いをしながら知らず乗り出す形になっていた姿勢を正した。
「はい。こちら皆の提督、ストレイト・クーガー……何？」
　内線を取ったクーガーが眉を顰める。
　耳に押し当てた受話器から、捲くし立てるような声が加賀の方にも漏れ聞こえた。
　相手側の慌てた様子から、加賀は異常事態を察知した。
　直接話を聞いていたクーガーの表情も、一瞬で険しいものへと変わっていた。
「第二艦隊が襲撃を受けただと!?」
　それは、現在『長距離練習航海』に出ている第二艦隊――島風と巻雲も参加している遠征に関する緊急事態の報告だった。

◆

桟橋に駆けつけたクーガーと加賀を待っていたのは、内線で連絡をした艦娘とボロボロになった第二艦隊の三人だった。
三人――四人で構成されていたはずの第二艦隊に、一人足りない。
足りないのは島風だった。
「何があった？」
クーガーの問い掛けに、真っ先に答えたのは巻雲だった。
「し、島風ちゃんが……まだ戦ってるんです！　お願いです！　助けてください、司令官様ぁ!!」
普段の大人に甘える子供のような口調ではない。聞く者の方がうろたえてしまう程悲痛な叫びだった。
しかし、クーガーは動揺など欠片もせず、縋りつく巻雲を受け止める。
「落ち着いて、順番に話してくれ。現場で何が起こった？」
「途中まで、予定通りの航路を進んでたんです。でも外洋近くの、折り返し地点に着いたあたりで、急に深海棲艦の襲撃を受けて……それで、敵が物凄く強くて、わたしも他の皆もあっという間に大破しちゃって、島風ちゃんが応援を呼んでこなきゃいけないって意見して……っ」
「予定通りの航路なのに襲撃を受けたのか？　制海権は確保してあるはずだろう」
「航路は絶対に間違えていませんでした。敵は一人で、しかも見たことのない深海棲艦だったんです！　戦艦みたいな装甲と火力で、それなのに艦載機まで操って……襲われた瞬間、本当に何も出来ずにやられちゃいました……っ！」
「情報のない新型か？　どうやら、とんでもない相手みたいだな」
「そんな怖い敵相手に、島風ちゃん一人だけ置いてきちゃったんです！　本当は、一番足が速い島風ちゃんが応援を呼びにいって、私達が残る方がいいのに……敵の攻撃をかわせたの島風ちゃんだけだったから、わたし達に逃げろって言って、それで……それで、わたし、本

当に逃げちゃったんですぅ！」
後悔と自責の念に遂に耐え切れなくなったのか、巻雲はその場に泣き崩れた。
第二艦隊の他のメンバーを見れば、やはりいずれも深い後悔を宿した表情で俯いている。
加賀は、彼女達を責める気にはなれなかった。
仲間を一人置いてきたことを薄情と思うつもりなど欠片もない。同じ艦隊を組む艦娘達の絆の強さは何処でも同じだ。海という広大で過酷な環境で共に戦う者達の結束は固い。
加えて、行動の善し悪しを判断するならば、これはたった一人で残るという無謀な選択をした島風の方が悪い。
巻雲の言うとおり、最も船速の速い島風が応援を呼ぶ為に鎮守府へ戻り、三人掛かりで敵の攻勢を凌いだ方がお互いに生き残る可能性は高くなる。
何故、島風は一人残ることを選んだのか？
真意は分からない。しかし、議論を行っている暇はない。
加賀はクーガーを見つめた。
これからどうするのか。
全てを判断するのは提督である彼だ。
「敵と交戦したポイントを教えてくれ。すぐに救援に向かう」
様子を窺うまでもなく、クーガーは即決した。
迷いのない決断に加賀は一瞬安堵し、しかしすぐに気を引き締めた。
問題は多いのだ。
「救援を出すのは構いませんが、メンバーはどうしますか？」
「速力が高い艦娘に絞って艦隊を組みます。選出は任せていいですか、加賀さん？」
「既に何人か候補は浮かんでいます」
「さすが、加賀さん！　速さは美徳です！」
「しかし、速力に加えて戦闘力も考慮すべきだと思います」
「まあ、聞く限り厄介そうな相手ですからねぇ」

「特に艦載機を使用したという事実が問題です。制空権を掴まれたままでは、送った救援が更に全滅しかねません。こちらも、空母系の艦娘が必要です」
「うちは空母が少ないですからねぇ。加賀さんも行きます？」
「もちろんです。しかし、艤装の準備に少々時間が掛かります」
一番の懸念はそれだった。
長距離練習航海とは、その名の通り遠方まで練習航海に出掛ける遠征任務のことである。
巻雲の話では、予定された航路上でも最も遠い地点で敵に襲われている。当然、救援がそこまで辿り着くには相応の時間が掛かる。
一分一秒が惜しい中、強力な敵との戦闘が確定している以上準備も疎かに出来ない。
果たして、自分達が到着するまで一人残された島風は持ち堪えられるのか――。
「ガガさん」
知らず焦りによって思考に没頭していた加賀の意識を、聞き慣れた声と呼び方が現実へと引き戻した。
「……加賀です」
自分よりも高い身長を見上げれば、やはりそこには見慣れた顔が映っていた。
普段は不真面目で、言動はいつもエキセントリックで、ここぞという時には頼りになる――そんなストレイト・クーガーという男の不敵な笑みがあった。
「速力という点に置いてはオレ以上の人間も艦もいや世界中の何者もいないと思うんですよ、加賀さん」
その言葉で、全ての納得がいったかのように加賀は頷いた。
「分かりました。第二ドックにある内火艇を使ってください」
「このまま行っちゃっても大丈夫ですか？」
「問題ありません。船の方も、いつでも発進出来るようにしてあります。あなたは誰よりも速く行動する上に前触れなしに動き出す人だから」

「褒め言葉として受け取っておきましょう！」
　加賀はクーガーの眼をじっと見つめた。
「提督」
「はい」
「先程の話の続きだけれど」
「何を信じるのか決めましたか？」
「わたしは、あなたを信じるわ」
　その答えを聞き、口元の笑みを深くすると、次の瞬間クーガーは駆け出した。
　文字通り、風のように。
「……あ、あの！　いいんですか、加賀さん!?」
　呆気にとられながらそれを見送った巻雲が、慌てて加賀に問い掛ける。
「ひょっとして、司令官様は島風ちゃんの所へ行こうとしてるんじゃ……」
「ええ。単独で先行するつもりです」
「き、き、危険ですよ！　っていうか、そもそも司令官様はただの人間ですよ！」
「ああ、そうね。あなたはあの人の『力』を見たことがなかったわね」
　加賀は揺ぎ無い信頼を宿した口調で答えた。
「大丈夫、あの人が『間に合わない』なんてことはないわ。あの人の力は『何でも速く走らせることが出来る』のだもの」

後編

肉体の外側と内側で、何もかもが加速していた。
――足。
――砲。
――主機。
――呼吸。
――鼓動。
――思考。
加速する。
世界を置き去りにしながら、島風は最大船速で向かっていた。
己の限界へと。
「オ前、速イナ」
目の前の敵が笑いながら、耳障りな発音で言った。
見たことのない姿形をした深海棲艦。
その戦闘力も前代未聞だった。
小柄な島風と同程度の体躯でありながら、腰から生えた自身の全長よりも巨大な尾が異常なまでに多彩な武装を搭載している。
先端に生えた砲身から戦艦並の火力を吐き出し、無数の艦載機を射出する。加えて、雷撃まで放ってくる。ここに強固な防御力まで備えているのだから手に負えない。
特に艦載機が厄介だった。敵はたった一人だが、既に上空を覆い尽くさんばかり増えた羽虫のような艦載機が島風を完全に包囲していた。
敵の攻撃はどれも一撃で致命傷だが、こちらの攻撃はほとんど通用しない。
数の上でも圧倒的に不利。
唯一、島風が勝っているものはスピードだけだった。
「ダガ、速イダケダナァ」
初めて自分の前に現れた時から敵は笑っていたが、今の笑みが嘲りの意味を含んでいることに島風は気付いた。

自分の限界が近いことも分かる。
唯一勝っているスピードが翳り始めていた。
巻雲達を逃がした後の戦闘再開からどれくらい時間が経ったのか分からない。
島風は、そのスピードと幸運によって、敵の攻撃をことごとく回避していた。
直撃は一度もない。だから、こうして息をしていられる。
しかし、砲撃の至近弾や艦載機の機銃など、避けきれない攻撃の余波を繰り返し受け止めた身体は既にボロボロだった。
最大船速を発揮し続けた艤装はオーバーヒート寸前で、ボイラーが爆発しそうだ。
前世の記憶が過ぎる。
かつてのように、敵の攻撃に追い立てられ、爆走して果てるのが自分の運命なのだろうか――。
「……そういうあんたはノロすぎなんだけど！」
己の悲観を、島風は笑い飛ばした。
それが出来たのは、きっと敵が自分の『速さ』を侮るような言葉を使ってくれたからだ。
自信でありプライドである自分のスピード。
それをずっと張り合ってきた大嫌いな提督の姿が、頭の中の弱い考えを全て吹き飛ばして、駆け抜けたのだ。
頭と胸の内に、新たに反逆の意思が生まれた。
負けられない、と思った。
少なくとも、自分よりも遅い目の前の敵には負けてやれない――！
「速イダケデ何ガ出来ル！」
高笑いを返しながら、敵は艦載機の群れをけし掛けた。
強力な爆撃能力を持つ飛行体は、しかし全機が一斉に機銃による掃射を仕掛けてくる。
ダメージは微々たるものだが、弾幕は完全に回避する方法がない。
海上を高速で疾走する島風の回避運動は神掛かっていたが、降り注ぐ弾雨が肉体と艤装に無数の小さな穴を空けた。

噴き出した血とオイルが海水をどす黒く染める。
ついに体重を支えきれなくなった左足から体勢を崩した島風は転倒した。
派手な水飛沫を上げながら水面を転がる。
艦娘である島風は、生きている間は海中に沈むことはない。
しかし、もう走れなかった。
「終ワリダ」
全身に激痛と同時に力が抜け落ちるような脱力感を抱きながら、かろうじて顔を持ち上げた。
敵の巨大な砲口が、自分に向いているのが見える。
あの砲撃を喰らえば、きっと跡形も残らない。
死の恐怖よりも、敵の勝ち誇った顔が気に入らなかった。
「ヤハリ、速サダケデハ何モ出来ナカッタナ」
撃たれる。
今。
「――ア？」
「――え？」
不意に、音が聞こえた。
戦闘が今まさに決着しようというこの瞬間、自分と敵以外誰もいないこの海上で、徐々に近づいてくる音を二人は聞いたのだ。
甲高いモーターの叫びと水を掻き分ける爆音。
音のする方向へと視線を向ける。
何もない水平線。
突如、そこから一つの影が水柱と共に飛び出した。
「何ダ……船カ？」
猛烈なスピードで近づいてくるそれは、一隻の小型艦船だった。
奇妙な船体だった。
遠目にでも分かる――ド派手なのだ。
ショッキングピンクに光沢のあるカラーリングで染め上げられた船体は、とてもまともな艦船とは思えないデザインだ。
やけに鋭角的なフォルムのそれは、凄まじい船速も含めて鮫とロ

ケットを掛け合わせて出来上がったかのような印象を受けた。
そして、そんな船に乗っているのは――。
「て、提督!?」
島風は思わず叫んでいた。
「待たせたなぁ、シカマセェ！　いや待つはずがないな、何故ならオレは世界を縮める男、誰かを待たせるなど有り得ないのだ！」
クーガーもまた叫んでいた。
「大は小を兼ねるのか速さは質量に勝てないのか、いやいやそんなことはない速さを一点に集中させて突破すればどんな分厚い塊であろうと砕け散るゥゥッ!!」
「何ィ!?」
減速することもなく一直線に突っ込んでくる船体に、敵は度肝を抜かれた。
向かってくる船が、今まさにトドメを刺そうとしていた艦娘の味方であることは予想がついた。それを返り討ちにしてやろうと考えていた。
しかし、自分に激突しようと突っ込んでくる相手の行動は、完全に予想外だった。
その一瞬の思考の間隙を最速で駆け抜けたクーガーが、大質量の砲弾と化した船体で敵を捉えていた。
激突。
そして、大爆発。
「ハッハッハッ、ハァーッ!!」
クーガーの高笑いが、諸共爆音に飲み込まれる。
目の前で繰り広げられた壮絶な光景に島風は悲鳴を上げかけた。
「ドラマチーック！　エスセティーック！　ファンタスティーック！　ラーンディーングー!」
しかし、爆煙を突き破って飛び出してきたクーガーの妙に余裕のある姿を見て、一瞬で萎えた。
爆風に吹き飛ばされて空中に投げ出されたように見えるが、実際は無傷である。

どういう理屈なのか、爆発の影響が服にすら及んでいない。
島風のすぐ傍に頭から着水する。
「ハァァ～、２２分３１秒。また世界を縮めてしまったぁ……」
「……来てくれたんだね、提督」
死を覚悟した戦場へ風のように現れた、あまりにも普段通りの提督の姿。
島風は深い安堵を感じて、知らず涙を浮かべていた。
クーガーはいつものように不敵な笑みを浮かべ、
「おっと、安心するにはまだ早い。奴さん、まだまだ元気一杯みたいだ」
鋭い視線は爆煙の中心へと油断なく向けられていた。
船の残骸が上げる黒煙はゆっくりと晴れていく。
それを悠長に感じたかのように、爆発の中心で突風が発生して、一瞬で煙を振り払った。
おそらく尾で振り払ったのだろう。そこには無傷の敵が悠然と佇んでいた。
「……ニンゲン？」
クーガーの姿を認識した敵は驚いたように呟き、
「人間ダト……」
ギザギザの歯を剥き出しにして、口角を吊り上げた。
口の両端が裂けて耳まで届きそうだった。
「人間ダトッ!!」
歓喜――いや、狂喜の篭もった甲高い声で哄笑した。
人語を解し、意思や理性らしきものを感じさせる深海棲艦の存在はこれまでにも確認されている。もちろん、それらの存在と意思を疎通することに成功したという例まではない。
しかし、島風には目の前の深海棲艦がそれらの存在と同類だとは思えなかった。
目の前の深海棲艦は、本質的に理性のない怪物なのだ。
その咆哮が言語の形を偶然取っているに過ぎない。
分かりきったことだが、話は通用しない。

この場を切り抜ける為には、目の前の敵を倒すしかない。
「うーん、なんという文化的要素の欠片も見当たらない敵だ。だが、話は早い。そして、速いというのは重要だ！」
深海棲艦を前にして全く臆した様子もない自身の提督を、島風は少しだけ頼もしく思った。
少しだけ、なのは自信満々の態度に反して、肩まで海水に沈んだままだからだ。
決死の特攻も通じず、無傷の敵を前にしてどうするつもりなのか――。
「ギャハハハッ！　逃サナイゾ、人間!!」
「逃さない？　オレが逃げるとは侮ってくれるな。しかも、オレに追いつけると思っている。どちらかというと、後者の方が気に入らない！」
クーガーの的外れな怒りにツッコもうかと一瞬悩んだ島風の眼に、信じ難い光景が広がった。
突然、クーガーを中心にして海面に穴が開いたのだ。
正確には、周辺の海水が無数の粒子となって霧散し、次の瞬間それらがクーガーの両脚に収束して全く異なる物質へと変換された。
――物質変換能力（アルター）
「《ラディカル・グッド・スピード》脚部限定!!」
クーガーの両脚は膝から下が、一瞬で鋭角的なフォルムの装甲に覆われていた。
粒子化した分の体積が消失したことで発生した空隙は、すぐさま周囲の海水が雪崩れ込むことで埋められる。
しかし、そこにクーガーが再び沈むことはなかった。
変質した両脚――アルター《ラディカル・グッド・スピード》が融合装着された両脚を小刻みに動かしながら海面に立っていたのだ。
「何それ、どうやってるの!?」
「片足が沈む前にもう片足で海面を踏み締めるこの反復作業を高速で行うことによって海面に立つ！　これが『速さ』だっ!!」
要は、超高速の足踏みだった。

言葉を失う島風を尻目に、クーガーは足踏みを続けながら、敵に向けて前傾姿勢を取った。
「さあァァ、行くぞ！　受けろよ、オレの速さを――！」
固い地面に対してそうするように、海面へ向けて一際鋭く足を突き出すと同時にラディカル・グッド・スピードの踵からパイルが射出された。
それによって生み出された爆発的な反動が、クーガーの身体を弾丸のように前方へと吹き飛ばした。
爆音と盛大な水柱を残して、クーガーの姿が掻き消える。
「衝撃のォ――」
一瞬で敵に肉薄し、蹴りを繰り出す。
島風も、敵の深海棲艦さえ反応出来ない。
「ファースト・ブリットォォッ!!」
比喩ではなく弾丸の速度を持って放たれた蹴りは、敵に防御の暇すら与えなかった。
腹部に直撃を受けた敵の身体が、飛び石のように海面を何度も跳ねながら後方へ吹き飛んだ。
人間が繰り出したとは到底思えない威力だ。
例え艦娘であっても、駆逐艦クラスの自分ならばとても耐えられない。島風は戦慄した。
しかし、敵の装甲と耐久力は駆逐艦クラスではなく戦艦クラスだった。
口から血を吐き、確かなダメージを負いながらも、敵はすぐさま体勢を立て直した。
砲撃と同時に上空から艦載機の攻撃が放たれ、十字砲火となってクーガーに襲い掛かる。
血に汚れた口元は相変わらず吊り上り、狂ったような哄笑は止まない。
冷たい怖気が島風の背筋を走る。
しかし、クーガーの方はそんな戦慄を感じるどころか対抗するような高笑いを上げながら走っていた。海面を。

「大した火力だ！　だが、足りない！」
海上を疾走しながら、四方から迫る攻撃を尽くかわしていく。
「足ぁぁりないぞっ！」
それは攻撃を『回避する』というよりも『置き去りにする』といった表現の方が相応しいスピードだった。
「お前に足りないもの、それは情熱・思想・理念・頭脳・気品・優雅さ・勤勉さ！　そしてなによりもォォオオッ!!」
慣性を無視したかのような鋭いカーブを描いて方向転換すると、敵に向けて突進する。
それに気付いて姿勢と砲口の向きを変えようとした瞬間、既にクーガーは目の前にいた。
「――速さが足りない!!」
薙ぎ払うような蹴りが側頭部を捉え、敵は再び横殴りに吹き飛ばされた。
それでも倒れない。
しかし、クーガーもまた次の瞬間にはその場から消失している。
反撃は全て空を切った。制空権確保によって圧倒的なアドバンテージを掴んでいるにも関わらず、標的を捉えることが出来ないのだ。
クーガー一人に、完全に翻弄されていた。
「信念と文化無き本能だけでは、オレに一生追いつけない！」
「……確カニ、速イ」
攻撃の手を止め、敵は高速で移動し続けるクーガーを睨みながら呟いた。
その様子をクーガーは内心でいぶかしんだ。
こちらを捉えられないと悟って、スタミナ切れを狙った持久戦に持ち込むつもりか？
もしも、そういう考えならば、むしろこちらは有利になる。時間が経てば、加賀の率いる艦隊が駆けつけるのだ。
「ダガ、ヤハリ速イダケダ！」
深海棲艦特有の青白く発光する眼球がギョロリと動いた。

クーガーから移した視線の先には、島風がいた。
「――野郎!?」
敵の砲口が、島風の方へ向けられる。
もちろん、島風もただ戦闘を眺めて呆けていたわけではない。
標的が自分に変わったことを察すると、すぐさまその場から離れようと足を動かした。
そして、踏み出した足が体重を支えきれずに膝から崩れ落ちた。
自覚していなかったダメージの深刻さと、クーガーが駆けつけてくれた安堵感によって生まれた気の緩み。それらが最悪のタイミングで重なってしまったのだ。
クーガーの判断と行動は速かった。
砲撃が放たれた瞬間、島風の前に躍り出ていた。
「壊滅のセカンド・ブリットォ!」
繰り出された蹴りと砲弾が接触した瞬間、大爆発が巻き起こり、クーガーの身体を呑み込んだ。
島風の上げた悲痛な叫びもまた爆音に掻き消された。
戦艦の砲撃は、生身の人間が耐えられるような威力ではない。
しかし、島風の声に応えるように、爆炎の中からクーガーが姿を現した。
砲弾を蹴りつけた反動を利用したのだろう。空高く打ち上げられたクーガーの身体は、弧を描いて島風のすぐ傍に着水した。
「提督、大丈夫!?」
先程と同じような状況。
しかし、今度は無事では済まない。
沈んだままのクーガーを、島風は慌てて引き上げた。
体格が違いすぎる為、上半身までしか水の中から持ち上げることが出来なかった。
「なるほど、これが戦艦の火力というヤツか。うちの戦艦組は怒らせないようにしなきゃならんなぁ」
クーガーの軽口は、島風の耳には入らなかった。
顔を青褪めさせて、足元に視線を落としていた。

クーガーを中心にして海面に赤黒い色が滲み、広がっている。
戦艦の砲撃を蹴りで受け止めたのだ。海面下に沈んだクーガーの両脚がどんな状態になっているのか、想像に難くなかった。
「て、提督……足が……っ！」
「安心しろ。まだ二本ともくっついてるよ」
「ごめんなさい、わたしが……！」
「謝るんじゃねぇ！」
クーガーの一喝が、錯乱しそうになった島風の正気を引き戻した。
涙で滲んだ瞳を、これまで見たこともないほど力強い、そして甘えを許さない厳しさを込めた眼光が射抜く。
「負い目は弱い考えを生む！　その弱い考えに反逆しろ！」
「反逆……」
「ここでオレと一緒にくたばるか？　もう二度と巻雲達の所へ帰れないと、諦めるのか!?」
島風の心が震えた。
それは恐れではなかった。
自分の中に先程まで存在していた恐怖――眼を背けていたそれを睨みつけることで生まれる魂の震えだった。
弱音を吐き出しそうになっていた口を食い縛り、涙を拳で拭うと、島風は前を見据えた。
相も変わらず不快な笑みを浮かべて、悠然と佇む深海棲艦。
頭上を禍々しい形状の飛行体が飛び回り、凶悪な砲身は自分達に向けられている。
しかし、もはや島風の心に恐怖はなかった。
その恐怖に反逆する意思だけがあった。
「オレが正面から仕掛ける。それに合わせて、お前もありったけの攻撃を叩き込め」
クーガーの提案に、島風は自身の状態と周囲の状況を確認した。
ダメージは大きいが、幸いなことに艤装は未だ稼働中だ。
しかし、肝心の武装は背中に残った魚雷のみ。しかも、発射装置が損傷して撃ち出すことが出来ない状態だった。

クーガーが正面から仕掛けると言ったが、敵も彼だけに集中して自分を放置するという愚は冒さないだろう。
例え砲身がこちらを向いていなくても、頭上には無数の艦載機が飛び回っている。一度かわせなかったその攻撃を、何故次はかわせると思えるのか。
無謀だった。
無理だと思った。
どう考えても無茶だ。
「――やる!!」
「上等ォ!!」
島風が答えると同時に、再び周囲の海水が消失した。
粒子の輝きが、今度はクーガーの全身を包んでいく。
突然出現した空間の間隙によって二人の身体が一瞬宙に浮いた状態になった。
まるでその瞬間を狙っていたかのように、敵の砲塔が火を噴いた。
クーガーと島風は、互いの足を蹴り合うことで反動を生み出し、左右に分かれて砲撃を回避する。
「誰もオレに――オレ達に追いつけない!」
粒子の収束が終わり、物質の再構成が完了する。
今度は《ラディカル・グッド・スピード》を全身に纏った状態で、クーガーは降り注ぐ砲弾の雨を駆け抜けた。
それはアルターの鎧というよりも、自分自身を弾丸に変えたかのような姿だった。
純粋な脚力だけではなく、背部や脚部から放出されるエネルギーを推進力として、更なるスピードで疾走する。
敵の照準はもはや全く追いついていなかった。
いや、弾速さえ追いついていないようだった。
「ダカラ、速イダケデ何ガ出来ル!?」
敵の禍々しい笑みは変わらなかった。
己の力に絶対の自信を抱いている。
どれだけ素早く攻撃をかわそうが、自分を倒さなければ戦いは終わ

らないのだ。
そして、倒す為には自分を攻撃しなければならない。
その瞬間を狙っていた。
自分に攻撃する為に相手が近づき、攻撃が当たることさえも許容して、接触の瞬間に生じる一瞬の停滞へすかさず反撃を叩き込み、粉砕する。
速さだけでは、自分にダメージを与えることは出来ても倒すことまでは出来ない――そう確信していた。
「じゃあ、これならどうだ!?」
海面を蹴りつけて、クーガーは空高く跳んだ。
空中へ身を投げ出した標的に向けて殺到する艦載機の群れ。それらを尻目に、両脚の踵を強く打ち合わせる。
火花が散り、それが発火点となって右の踵からジェット噴射のようにエネルギーが噴き出した。
クーガーの全身が独楽のように回転する。
「瞬殺のォ――」
その勢いとスピードはもはや竜巻だった。
高速回転し続けながら繰り出される猛烈な回し蹴りは、周囲の艦載機を蹴散らしながら、眼下の敵に向けて襲い掛かった。
「ファイナル・ブリットォォォォォッ!!」
渾身の一撃が、真正面から激突する。
敵はやはり回避することが出来なかった。
しかし、咄嗟に自身の尾を盾として防御することには成功していた。
クーガーの攻撃は、戦艦の装甲と馬力をしてそれに圧し勝つ程の威力を発揮していたが――それでも圧倒するまでには至らなかった。
激しく火花が散る激突の最中、敵はほくそ笑んだ。
――これを凌げば、勝ちだ!
攻撃の勢いが衰えた瞬間が、全ての決着だと確信した。
「――あなたって遅いのね」
その囁きは、背後から聞こえた。

思わず肩越しに振り向き、眼を見開いた。
島風が、そこに立っていた。
クーガーに意識を割いていたとはいえ、島風にも注意は向けていたはずだった。
実際に、砲撃の照準こそ向けなかったものの、差し向けた艦載機は島風の方が多い。
既に十分なダメージを負った相手だ。一度回避出来なかった攻撃をもう一度繰り返せば、それだけで沈められる。そう判断した。
しかし、その予測を裏切って、島風は敵の背後に回り込んでいた。
かつてないスピードを発揮して弾丸の雨を走り抜け、避け切れない攻撃はあえて背中の魚雷発射管で受けた。
低威力の機銃を使ってくることは予想していたが、外装だけを破壊してくれるかどうかは賭けだった。
そうして発射管から強引に引き抜いた魚雷五本を両手に抱えて、今、ついに島風は敵を捉えたのだ。
「にひひっ」
「……糞ガッ！」
島風の悪戯っぽい笑みと、ついに引き攣った敵の笑みが向き合う。
「五連装酸素魚雷、行っちゃってぇー!!」
島風は五本の魚雷を、文字通り叩き込んだ。

◆

轟沈した深海棲艦や艦娘の死体は、海に沈んで二度と発見されることはない。
一時期、深海棲艦の生態を調べる為に海の底までさらって死体を確保しようと何度も捜索隊が向けられたが、そのどれもが肉片すら見つけることが出来なかった。
海に沈むと同時に消滅しているとしか考えられない特性が、深海棲艦の謎をより深くしていた。そして、それは艦娘にも同じように当て嵌まることだった。

敵を沈めた地点からは、既に大分離れていた。
激しい戦闘があったとは思えないほど海上は静かで、他に艦影は見えない。
あの深海棲艦の仲間や援軍が現れるという心配はなさそうだった。
ため息を吐くと、島風はジト目で背後を振り返った。
「……おっそーい」
「なぁに気にするな。のんびり帰ればいいさ。その内、迎えに来た加賀さん達と合流出来るだろう」
ゴムボートの上に寝転がって、リラックスした体勢でクーガーが言った。
クーガーの乗ってきた内火艇に備え付けてあったのを、残骸から奇跡的に回収出来た物だ。
エンジンは付いていないので、オールで漕ぐか他の船で曳航するしかない。
他の船とは、つまり腰にロープを括り付けて繋いだ島風のことである。
艤装はかろうじて稼動しているが、戦闘のダメージに加えて限界まで酷使したせいで自慢の船足は見る影もない。
二人は互いの信条とは裏腹に、広い海上をノロノロと進んでいた。
「提督だったら自力で海の上走れるんでしょー？　わたしの方を乗せて帰ってよぉ。こんなに遅いの耐えられない！」
「おいおい、オレだって体力は人並みなんだぞ。鎮守府まで走って帰ったら疲れてしょうがない。代わりのボートを貸してくれるなら、世界を縮めてやるよ」
「わたしの艤装をあんな悪趣味なデザインに変えられるなんてイヤ！」
「ついでに、オレの出すスピードに耐えられないのか、大抵の乗り物は壊れちまうのさ」
「じゃあ、駄目じゃん！」
「そういうわけだ。さあ、頑張って一秒でも早くオレを地面のある所まで連れ帰ってくれ。シカマセ」

「もーっ、提督のバカ！　役立たず！　それと島風！」
「ハッハッハッ、すまんすまん」
鎮守府でいつも繰り広げているような、いつも通りのやりとり。
不意に泣きたくなるような安堵感を覚えて、島風は慌てて顔を前に向けた。
口ではああ言ったが、クーガーを連れて帰ることに不満は欠片もない。
むしろ、一刻も早く地上へ帰してあげたかった。
ボロボロになった彼の両脚を見る度に、胸が締め付けられるような不安と後悔を感じた。
無事に鎮守府へ帰れたとして、もう二度と地面に立つことが出来なくなっていたらどうしよう？
そんな悪い考えが頭を離れなかった。
もし、そんなことになったら、自分は艦娘をやめよう。そして、提督の足の代わりとなろう。
本気でそこまで考えていた。
自分が――艦娘という存在が何者かなど、違う存在になれるのかどうかなど、今の島風にはどうでもいいことだった。
「なあ、シカマセ」
快晴の空の下。僅かに波を蹴立てる音だけが響く空間で、クーガーの呟くような声がハッキリと聞こえた。
「何？　それと島風」
島風は振り返らずに応えた。
「敵に襲われた時、何で一人で残ったんだ？」
「何でって……」
「巻雲が分かってたんだ、お前が分からなかったはずがない。自分の足を一番信頼しているのはお前自身だからな。そのスピードを活かして、お前一人が鎮守府へ応援を呼びに行くのが判断としては正しいし、賢いやり方だったはずだ」
「……うん」
「仲間を置いていくのが心配だったから残ったのか？　だとしたら、

そいつは甘ったれた考え方だ。お前と同じことを仲間が考えないはずがない。仲間を見捨てたくないってのは誰だって同じだ」
クーガーの言葉は厳しく、同時に優しさが込められていた。
一人残った島風を心配したからこそ、彼はここまで駆けつけたのだ。
島風はその言葉と思いを噛み締めるようにしばらく黙った後、口を開いた。
「だってわたし、速いもん」
振り向かずに答えた。
「仲間を置いて、敵から逃げる方向に最大船速なんて出したくない。でも、敵に立ち向かう方向になら全速力で行ける。わたしが一番スピードを出せる方を選んだだけだよ」
「……なるほど」
背中越しに、クーガーが苦笑する気配を感じた。
「馬鹿だな、お前」
「な、なにおう!?」
「まあ、控え目に言って賢かねぇ。うん、やっぱり馬鹿だ」
「いいよ、もう！　自覚してるもん！　命令違反になるなら、帰ってから罰でも何でもやればいいよ！」
「安心しろ。そういう馬鹿は、オレも嫌いじゃない」
それは島風が思わず戸惑うほど嬉しげな声色だった。
「その馬鹿を極めてみろ、島風」
「だから、わたしは島風――」
そこまで言って気付き、驚きながら振り返った。
「合ってるだろう？」
そう言って、クーガーはニヤリと笑った。

◆

特殊部隊『ＨＯＬＹ』――その実態は、アルター使いのみで構成された対アルター犯罪組織である。

その本部の一室。ＨＯＬＹ部隊隊長マーティン・ジグマール専用のオフィスに、クーガーは居た。
ソファーに腰掛けた彼と背を向け合うように、窓の外を眺めながら佇むのはジグマール当人である。
「――足の具合は、もういいのかね？」
背を向けたまま、ジグマールが訊ねた。
「ええ、すっかりね。オレの速さには少しの翳りもありませんよ」
ジグマールの気遣いが社交辞令のレベルを出ていないことくらい察している。
上司を相手にして、クーガーは普段と何ら変わりのない軽口を返していた。
「それはよかった。唯一の長所が欠けてしまうようなら、君のような態度の悪い男をＨＯＬＹに置いておく理由がないからな」
「こいつは手厳しい」
似たようなやりとりを毎日のように加賀と行っているが、今の状況は全く楽しむ気にならない。
クーガーは、この定期報告という任務に早くも飽き始めていた。
「それで、どうかね？　鎮守府の様子は」
「順調ですよ。定期的に送られる任務は常に完遂。新しく着任した新人も含めて、問題を起こす艦娘は一人もいません。組織としては、このＨＯＬＹよりも上手くいっているんじゃないですかね？」
「手厳しい言葉だ」
「正直、オレには本土側の懸念が理解出来ませんなぁ。艦娘は深海棲艦とは明確に異なる存在です。謎が多いとはいえ、警戒しすぎでしょう」
「ほお、君らしくない浅慮な意見だ。まさか、情に絆されでもしたかね？」
「オレも相当な数の悪党を人間の中に見てきましたがね、彼女達にはそれがない。誰もが真っ当な信念や誇りを持っている。確かに艦娘は人間とは違う存在だと思いますよ、アルター使いとはまた別の意味でね」

「君の感情論で本土側が納得すればいいのだがな」
「何を言ったところで納得はしないでしょう。奴らは艦娘とアルター使いを一括りにして利用したいだけですよ。それこそ、深海棲艦まで含めてね」
「フッ、恐ろしい話だ」
「呆れる話ですなぁ」
ジグマールが振り返る。
「――深海棲艦や艦娘は、アルターによって構成された存在である」
かつてクーガーに告げた言葉を、再び繰り返すように言った。
「そういった推論が出ていることを、私は鎮守府に着任する前の君に教えたはずだ」
「ええ、覚えていますとも」
「いい加減、その推論に対する君の結論を聞かせてもらいたいものだ」
「生憎とオレは研究者じゃありません」
「艦娘と深海棲艦に接触したアルター使いに訊いているのだ」
ある日突然、海から現れた深海棲艦と艦娘。
片や人類の敵、片や人類の味方。
分かりやすく区別されたこの二つの存在を、同一視する人間は少なくなかった。
大隆起によって生み出された禁忌の地、ロストグラウンド。そして、そこから生まれるアルター使い達――それらと何ら変わりはない。同じモノだ。
人類は深海棲艦や艦娘と出会う前に、アルターに出会った。
抗うことの出来ない強大な力に遭遇し、その恐ろしさを知った。
多くの人間の心には、得体の知れない存在への恐怖と忌避感が深く根付いている。
これまでに判明した艦娘の特性や生態も、アルターとの関連性を感じさせるものが多かった。
彼女達が戦闘に使用する艤装は、稼動の為に燃料や弾薬の補給を必要とする。
修理には鋼材が、艦載機にはボーキサイトという資材を消費する。

機械ならば資材を必要とすることは何ら不思議ではない。
しかし、艦娘の用いるそれらは機械ではなかった。
複雑な工程を経ることなく、吸収されるように消える資材。復元する損傷。しかも、それは艤装だけに留まらず、艦娘自身が負った傷まで同じような現象によって治癒してしまう。
明らかに生物ではない。
しかし、意思を持ち、言語を解し、人類に好意と敵意という極端な感情を抱く。
何処からやって来たのか分からない。
何故現れるのか分からない。
深海棲艦と艦娘は、いずれも普通の人間にとって忌避する存在という点において共通していた。
「彼女達は明らかにアルターに近しい能力を使っている。来夏月のように、アルターが自我を持つ例も存在するのだ」
「しかし、全ての物質ではなく資材にのみ作用するという異なる点も存在するでしょう。他にも、過去に実在する艦船の記憶を持っている理由が分からない」
「君は、彼女達がかつての艦艇の魂を持つ生まれ変わりなどという説を信じているのかね？」
「さあ、どうでしょうね」
「いずれにせよ、今の段階では推論を重ねるだけで実証にまでは至っていない。だからこそ、君が選ばれたのだ」
のらりくらりとかわすクーガーを逃がさぬように、ジグマールは鋭い視線を向けた。
「彼女達がアルターかどうか、試してみれば分かる。アルターの再々構成――優れたアルター使いである君ならば可能なはずだ」
他の物質を再構成することによって生み出されるアルター。
しかし、そのアルターもまた再構成されたとはいえ物質には違いない。
それを更に再構成する――再々構成。
自身のアルターだけでなく、精神力が大きく上回れば他者のアル

ターを侵蝕し、分解することも可能になる。
ジグマールはそれを行えと暗に告げているのだ。
――艦娘達に対して。
クーガーは口元に笑みを維持したまま、何も答えなかった。
返答に窮したようにも、本当に今の状況を楽しんでいるようにも見える。
そのどちらなのか自分には見抜けないと悟ると、ジグマールは緊迫した空気を和らげるように苦笑を浮かべた。
「気が進まないようだな」
「深海棲艦という人間にとって無条件の敵が存在することは変わりませんからねぇ。おまけに、敵の勢力は計り知れない。新型の報告、ご覧になったでしょう？」
「ああいったモノが、今後も増えていくというのかね？」
「それに対抗する為に、艦娘の協力は必要です。少なくとも彼女達が我々に好意的なことは間違いありませんよ。それこそ、アルター使いにだって平等にね」
「……君は私の弱みを突くのが上手いな」
「申し訳ない」
「ふむ。では、質問を変えよう。仮に彼女達がアルターである説が正しいとして、だ――構成したのは一体どのような存在なのだろうか？」
初めてジグマールとの会話に興味を示したとばかりに、クーガーが肩越しに振り返った。
「深海棲艦と艦娘に共通性があるのは確かだ。この対極の存在を一括りに構成したアルター使いがいたとしたら、それは一体何者なのだろうか？」
「これはオレの考えなんですが――」
「何かね？」
「きっと鼻で笑うでしょう」
「何でもいい。言ってみてくれないか」
クーガーは黙ってソファーから立ち上がり、ドアに向けて歩いた。

ドアノブに手を掛け、そこでようやくジグマールの方へ顔を向けた。
「海。あるいは地球ですな」
「ほう？」
ジグマールは面白そうに笑った。
「彼女達は人類に向けて送られた罰と救済。母なる海と大地のアルター――そう考えるわけですよ、オレは」
「なかなか興味深い自論だ」
「そうでしょう？」
そう言って笑うと、ジグマールの許可も得ずにクーガーは退室した。
ジグマールもまたそれを咎めなかった。
「――『向こう側の世界』を覗いた君の言葉でなければ、一笑に伏していたところだがね」
一人、部屋に残ったジグマールは自身のデスクに備え付けられた端末を起動した。
艦娘に関連するファイルを開く。
クーガーが提督を務める鎮守府を含め、ＨＯＬＹはこれまでに複数の艦娘を保護し、管理していた。
しかし、それ以外の艦娘が管理の及ばない場所で不特定多数確認されている。
深海棲艦と同じように、彼女達もまた何処から、何時現れるのか分からないのだ。
そして、ＨＯＬＹに所属する以外の艦娘達が確認された場所――奇しくもそこは同じくＨＯＬＹの管理にないアルター（ネイティブアルター）使い達が多く住むエリアだった。

◆

「――朝潮（あさしお）、準備は出来てるか？」
「はい。いつでも出撃可能です。司令官、ご命令を！」

「今回の任務は、市街への違法物品の密輸の阻止だ。この種の犯罪はこれまでに度々繰り返されているが、今回は陸路ではなく海路が使用される可能性が高い。そこで、お前達艦隊の出番だ」
「了解しました！」
「深海棲艦が相手ではないが、犯罪グループにはネイティブアルターの存在も複数確認されている。油断はするな。だが、一人残らず確保しろ」
「朝潮、ご期待に応えてみせます！」
「……それと、俺を司令官と呼ぶな。ＨＯＬＹ部隊の司令官はジグマール隊長だ。誤った呼称は、現場での混乱を招く」
「でも、わたしにとっての提督は……いえ、も、申し訳ありません」
「俺はお前達の提督になるつもりはない。だが、艦娘を共に戦う対等な仲間だと認めている」
「は、はい！　光栄です！」
「俺の名は劉鳳（りゅうほう）だ。そう呼ぶといい」

◆

「――カズマァ！　あんた、こんな時間まで何処行ってたのよ!?」
「ゲッ!?　霞（かすみ）かよ……よりによって最悪の奴に見つかっちまった」
「あ、カズくん。おかえりー」
「ただいま、かなみ。けど、その呼び方はやめろって！」
「はんっ、あたしはかなみのように甘くはないのよ！　それで、何してたの？」
「仕事だよ……」
「また君島とつるんで？　それで、幾ら稼いできたのよ？」
「……ほらよ」
「はあ!?　これっぽっち？　こんなの全然稼ぎのうちに入らないわよ！　あんた、何やってたの!?」
「まあまあ、霞ちゃん。カズくんも疲れてるだろうから、とりあえず中に……」

「こんな役立たず、家に入れる必要ないわよ！　あんた、今日は外で寝なさい！」
「か、勘弁してくれよ」
「あんたを養う為に、かなみがどんだけ頑張って働いてるか分かってんの!?」
「もういいよ、カズくんが甲斐性なしのロクデナシなのは分かってるから」
「おまけにクズよ！」
「……そうね、そこにウスノロを足してもいいよ」